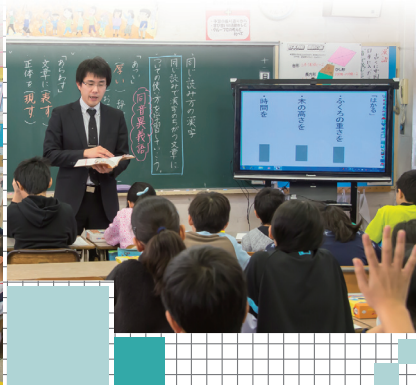


導入事例
てれたっち児童の「見たい、知りたい、やってみたい」を後押し！
「てれたっち」が積極的な学びをサポート

青森市立泉川小学校は、全28クラス、児童数は746名（平成29年4月時点）という、青森県内で最大規模を誇る小学校です。同校において、国語、算数、社会、外国語と、幅広い授業で「てれたっち」を活用されている山崎智洋先生（5年生担任）に、その活用方法や効果、将来のビジョンなどお話を伺いました。

※先生のご紹介、学校での設置状況などは取材当時のものです。



※ディスプレイは別売りです。

導入商品

外付け型タッチ化ユニット
「てれたっち」

DA-TOUCH / WB

電子教科書の活用も促進「同じ教材なのに、使用感があまりに違って驚き」

「てれたっち」を導入したことで、電子教科書の活用が進んだと伺いました。

山崎先生：以前から外国語の補助教材として電子教科書の「Hi, friends!」を使ってきました。大型ディスプレイとパソコンで利用していましたが、悩みもありました。それまでの環境は、入力デバイスがマウスしかなかったので、私が手元のパソコンの画面に向かい、マウスで操作する必要があったのです。児童から見たら、授業中に急に先生がかがみこんで、ディスプレイ下に設置されたパソコンをカチャカチャと操作し始めるということです。これではリズムが乱れてしまいますよね。しかし「てれたっち」なら、ディスプレイ上でタッチペンを使って操作できます。児童と対面したまま、同じ画面を見て授業を進めることができ、テンポもまったく削がれません。同じソフトウェアなのに、「てれたっち」があるだけでこんなに違うのかと驚きました。これまで使いあぐねていた面もある電子教科書ですが、「てれたっち」の導入でうまく活用できるようになったと感じています。



ゲーム性のある教材



「隠す」機能を使ったクイズ問題

「見たい、知りたい、やってみたい」を後押し。積極的な学びを実現

児童の皆さんの反応はいかがですか。

山崎先生：特に私が心がけていることは、皆の集中力を切らさないように、リズム感を大事にすることです。国語では「てれたっち」の白板ソフトの「隠す」機能を使い、クイズ形式で漢字の問題を出したりしていますが、非常に盛り上がりますね。「てれたっち」でボンと問題を表示した時と、同じ内容のプリントを配った時と比較しても、注目度がまるで違うのを実感しています。本校の教育方針は、「見たい、知りたい、やってみたい」という、積極的な学びを推進するものですが、「てれたっち」はまさにそれを後押しするツールです。

ICTやデジタルコンテンツに慣れ親しんだ世代の子どもたちにとっては、むしろ「より入りやすい」のかもしれないですね。

山崎先生：ゲーム性、テンポのよさ、目新しさなど様々な要因が、取っつきやすさにつながっていると考えています。とにかく「てれたっち」は子どもの学びに対する敷居を下げてください。逆に私たち大人の教員のほうが「ICTは敷居が高い」と思い込みがちで、苦手意識を持っている場合も多いですね。しかし「てれたっち」はわかりやすく非常によいツールですから、折に触れてほかの先生方にもお勧めしています。

「てれたっち」、黒板、プリント、それぞれの利点を活かした活用

それぞれのよいところを活かしつつ、「てれたっち」もツールの1つとして定着させていくわけですね。

山崎先生：黒板はやはり授業の中心となる重要なツールだととらえています。「てれたっち」はそれと併用して、サプの教材を表示したり、注目させたいポイントを表示したり、また、児童の考えの違いを比較したりといった使い方に優れていますね。また、これは電子化全般に通じることですが、データの再利用、共有が容易にできる点もメリットだと思っています。データやノウハウを蓄積して教員どうしで共有できれば、授業の改善にもつながりますよね。まだ「てれたっち」も大型ディスプレイも台数が足りず、すべての先生が活用できている状況ではありませんが、活用2年目となる来年度は、学内のほかの先生にもぜひ広めたいと思っています。すべて子どもたちのためになることですから、今後も積極的に活用していく予定です。

取材にご協力いただいた先生



青森市立泉川小学校
山崎 智洋 先生



CLIENT DATA

導入学校／青森市立泉川小学校
所在地／青森県青森市
設立／1975年



「注目度がまるで違います」